

出題のねらい

一般後期は、現代文2題(文学的文章、論理的文章)、古文の計3題のうち、2題を選んで解答します。

㊦は、矢田津世子「茶粥の記」からの出題です。主人公は「清子」で、彼女の夫「鈴木」は周囲から食通として知られていましたが、若くして急性肺炎で亡くなり、その後、清子は姑(鈴木之母)を連れて自分の故郷へ戻ります。本文は、清子が東京を離れ、故郷に帰る前日の出来事を描いています。本文の「良人」が「夫」を意味することを理解した上で、物語の場面と展開を的確に把握できるかどうかを問いました。

㊧は、西垣通『集合知とは何かーネット時代の「知」のゆくえ』からの出題です。生命の本質と心の問題について論じた箇所を抜き出しました。難解な言葉も出てきますが、文中で説明されている生命の性質と心のありかたについて正しく理解できれば、解答はさほど難しくありません。

㊨は、『大和物語』からの出題です。『大和物語』は、前半はいかにも歌物語という和歌をめぐる短めの物語が続きますが、後半は説話化されたやや長編のストーリー性のある読み応えのある物語で構成されています。出題した第168段は、後半に位置し、六歌仙の一人として有名な僧正遍昭に関する説話となっていて、当該箇所は、仁明天皇の崩御後、失踪して消息不明となった良少将をめぐる、周辺の人々が気をもむ場面です。なかでも子どももあつた最愛の妻の悲しみは深く、情を断ち切って出家した良少将(良岑宗貞)も葛藤します。初瀬の御寺(長谷寺)での、夫の消息を知りたいと観音にすがる妻と、偶然その参籠に出くわす出家した夫との劇的な出会いが、印象深く語られています。



【解答】(50点)

- |    |                                       |            |              |
|----|---------------------------------------|------------|--------------|
| 問一 | a 絶筆                                  | b 名残(余波も可) |              |
|    | c 壮観                                  | d 懇切       | e 衝動 (各2点×5) |
| 問二 | I エ                                   | II ア       | III イ        |
|    | IV イ                                  | V ウ        | (各2点×5)      |
| 問三 | 学校に奉職する                               |            | (4点)         |
| 問四 | 長い時間がたったということ。                        |            | (4点)         |
| 問五 | 外し忘れた柱暦や白いセトモノの帽子かけなど、どこにも良人の傍があったから。 |            | (6点)         |
| 問六 | ウ                                     |            | (4点)         |
| 問七 | 舌に記憶されている                             |            | (4点)         |
| 問八 | 御馳走                                   |            | (4点)         |
| 問九 | エ                                     |            | (4点)         |

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。難しい漢字を書けるかどうかよりも語彙力が試されます。誤答は、aは「絶」を「舌」、「筆」を「品」、bは「残」を「惜」「懐」、cは「壮」を「荘」「爽」、「観」を「感」、dは「懇」を「壑」「根」「魂」、「切」を「説」、eは「衝」を「衡」、「動」を「働」とした例が多く見られました。

問二 慣用表現に対する知識、文脈に合う語句を選ぶ判断力を測る問題です。問一と同様、語彙力が必要です。

問三 設問の要求を正確に理解する思考力、文脈にふさわしい語句を選び取る判断力を測る問題です。解答の前後に「姑を守って」や「こと」が含まれていても誤答ではありませんが、設問の要求に合った最も適切な解答は「学校に奉職する」です。「小学校で代用教員」は誤答。これは「結婚前」の職業であり、「その後」に「学校に奉職する」のが「代用教員」であるかどうか、本文には明確に述べられていません。状況から推測するのではなく、本文の記述に即して正確に解答することが求められます。

問四 比喩表現の意味を、文脈に即して適切に理解する思考力を測ります。傍線部の姑の言葉は、その前に「もう二十六七年もたって」とあることから、長い時間の経過について述べています。また、その後「二人を笑わせた」とあることから、ユーモアであることも分かります。誤答として「良人が化けて出てくる」「良人が生まれ変わる」が目立ちましたが、いずれも文脈を正しく読み解いていません。

## 一般入試／国語(後期)

問五 記述問題です。設問の要求を理解し、前後の叙述に注意を払いながら慎重に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力を測ります。「手垢の染みたような感じ」という比喻表現が、別の箇所でのように言い換えられているのかに注目します。傍線部の次の段落に「どこにも良人の佛がある」と表現されているので、この段落を要約すればよいのです。設問の要求、「傍線部以降の描写」「本文中の語句を用いて」から外れる解答は正答と見なされません。「床に入りがたい気がしたから」「懐かしかったから」等の解答は、設問の要求から外れるだけでなく、「悲しかった」の説明としても不適切です。

問六 比喩的な叙述を前後の文脈に即して適切に把握する思考力・判断力を測る問題です。「清子」の夫「鈴木」は、本文冒頭の「西尾」の言葉「命を落とす」から分かるように、既に亡くなっています。よって、傍線部の直前、清子が夫の「背を軽くゆすぶって」とあるのは客観的事実ではなく、清子の見た主観的な光景、およびそれに対する彼女の行動であると分かります。本文中、清子がなぜそのような光景を見、行動を取ったのかを示す叙述は「この家も今夜一晩の名残かと思うと、床に入りがたい思いがした」です。つまり、「この家に執心している」夫の幻影は、夫の佛の染みついた「この家」に名残を感じる、清子自身の生み出したものです。その名残を振り切り、夫の佛と別れるため、幻影の夫の「背を軽くゆすぶって」いるのです。誤答として最も多かったのは、夫が現実に生きているように述べた「イ」です。

問七 表現に注意し、同様の文脈、同様の意味合いで使われた語句を選び取る判断力を測る問題です。単に「記憶されている」とした解答は、傍線部の美味に関する意味合いが無くなるので不完全です。「今もなお残っている」とした解答は、傍線部とは全く異なる文脈・意味合いで使われているので誤りです。

問八 文脈と各文の繋がりを正確に把握し、相応しい語句を選び出す思考力・判断力を測る問題です。それまでの展開を的確に把握していれば難しくありません。誤答は様々で、本文全体に目を向けず、空欄のある一文のみに注目し、語句を適当に選んだものばかりでした。

問九 本文と設問の選択肢を読み解く思考力、適切な選択肢を選び取る判断力を測る問題です。選択肢

の表現に注意を払い、本文の内容と表現に合致しているかどうかを慎重に検討すれば、おのずと正答に行き着きます。良くできていました。



### 【解答】(50点)

問一	a 免疫	b 生殖	c 提唱	
	d 命題	e 踏襲		(各2点×5)
問二	I ウ	II エ	III オ	
	IV ア	V イ		(各2点×5)
問三	i ウ	ii イ		(各3点×2)
問四	心			(4点)
問五	(生命体は) 機械の(～)はない(から)			(5点)
問六	外界と脳内の事象との間の客観的関係を分析すること。			(5点)
問七	ウ			(3点)
問八	外界からの刺激はそのまま心に「入力」されず、思考はあくまで心の内部から創出されるものだから。			(7点)

### 【解説】

問一 漢字の書き取りです。aからdまでの正答率は7割ほどと高かったですが、eは2割ほどで、「跳襲」・「踏蹴」といった誤答が目立ちました。

問二 空欄にあてはまる接続詞を問う問題です。文章の論理展開を把握することが求められますが、全体の正答率は7割ほどとよくできていました。

問三 空欄に当てはまる語句を選択する問題です。文中で説明される生命の性質が理解できていれば、正答することは難しくないでしょう。iiは「ア」とする誤答が目立ちましたが、生命の反応がそれぞれの個体特有の経験と関わることが理解できていれば、正解にたどり着けたはずです。

問四 文中から空欄に当てはまる語句を抜き出す問題です。「頭」・「脳」・「眼」とする誤答が目立ちました。しかし、本文をよく読めば、ここで問題とされているのは生物の器官ではなく、主観・心であることは明らかです。とはいえ、正答率は4割ほどと低かったです。

問五 傍線部の記述の理由を述べた箇所を抜き出す問題。同じ段落に理由を示す文が繰り返し登場するので、さほど難しくなかったでしょう。正答率も7割ほどと高かったですが、「機械の」～「ている」とする誤答も目立ちました。このような抜き出し方では

文章の意味が正反対になってしまうので不正解です。

問六 傍線部が具体的に指す内容について、文中の言葉を用いて答える問題。前の段落で述べられている内容を押さえられていれば正解にたどり着けるはずですが、正答率は3割未満でした。また、正解に近い答案であっても、何を指しているのか具体的に示さないまま「両者」から始まるような、文章として大きな問題のあるものは減点せざるを得ませんでした。たとえ解答欄のマス目を埋めていようとも、文章としての体裁が整っていなければ点数を与えることはできません。

問七 前段までの内容理解を問う問題です。正答率は7割ほどと高かったですが、「エ」とする誤答が目立ちました。

問八 心が「徹底して自律的な閉鎖系」である理由を、本文中の語句を用いて答える問題。本文で繰り返し述べられているように、心は外部からの刺激に直接反応するものではなく、あくまで「自己創出的」に生み出されるという理屈が分かっているならば、答えられるかと思えます。しかし、文字数の多い記述問題ということもあってか、正答率は1割弱、部分点を付けた答案を含めても3割ほどでした。

㊦

【現代語訳】

帝が崩御された。御葬儀の夜、御供に人が皆お仕えしていた中で、その夜から、良少将が姿を消してしまった。友たち、妻も、どうしたのだろうと言って、暫くは、あちこち、探したけれども、噂は、耳に入っていない。法師になってしまったのだろうか。身を投げてしまったのだろうか。法師になっているのであれば、法師になっているときと噂が聞こえてくるだろう。やはり身を投げてしまったにちがいないと思うにつけ、世の中でもひどく気の毒がり、妻子たちはまったく言うに及ばず、夜も昼も、精進潔斎をして、世間の仏や神に一心不乱に願を立てるけれど、噂は聞こえてこない。妻は三人あったが、普通に愛情を注いでいる妻には、「やはり俗世では生きていけないと思う」と二人には言った。限りなく愛して子どももいる妻には、少しもそうした様子も見せなかった。このことを少しでも言えば、女も、ひどくつらいと思うにちがいない。(最愛の妻が悲しむ姿を見ると)自分も、出家できそうにない気持ちがしたので、(気持ちを伝えるどころか)立ち寄ることさえせず、俄に姿を消してしまった。

身を投げたのであれ、法師になったのであれ、「こう思っている」と夫が自分の気持ちも言わなかったことがひどくつらいことと繰り返し思っては、泣きいらだって、初瀬の御寺(長谷寺)に、この妻は参籠したのだった。この少将は法師になって、簀一つを着て、あちこち仏道修行して回って、初瀬の御寺で仏道修行している、ちょうどその時のことであった。女のいる局の近くに座って仏道修行していると、この女は、導師に次のように言う。「この人がこのようになってしまったけれど、もし生きてこの世にいたのであれば、もう一度会わせてください。身を投げて死んでいるのであれば、成仏させてください。たとえ身を投げて死んでいるとしても、この人の有り様を、夢でも、現実でも、聞いたり見せたりしてください」と言って、自分の装束、表着下着、帯、太刀まで、すべて読経のお布施にするのを見ると、(この女が私の最愛の妻だと良少将は気づき)気が動転し、悲しいこと、喩えようがない。走って出て行こうかどうしようかと何度も思ったけれども、その度に思い返し、じっとして、一晚中泣き明かした。私の妻や子どもたちの泣きながら観音にお祈りしている声が聞こえる。たいそうつらい気持ちがした。しかし、こらえて泣き明かして、翌朝に辺りを見ると、簀も何も涙のかかった所は、血の涙で真っ赤だった。「ひどく泣くと、血の涙というものは、ほんとうにあったのだなあ」と言ったのだった。「ほんとうにその折、自分は走って出ていきたい気持ちがした」と、後に言ったということだ。



## 一般入試／国語(後期)

【解答】(50点)

問一	エ	(4点)
問二	妻	(3点)
問三	③ア ⑥エ ⑦イ	(各3点×3)
問四	法師になることができそうにない気持ち	(5点)
問五	妻が長谷寺に参詣した時期が、良少将があちこちで修行し、ちょうど長谷寺で修行することになった状況。	(8点)
問六	(1)身を投げ (2)ありけるを	(各3点×2)
問七	Aカ Bエ Cオ Dイ	(各3点×4)
問八	ア	(3点)

【解説】

問一 「さて」は、法師になりて、の意。また「聞こえなむ」の「聞こえ」は、噂が聞こえる、評判が立つ、の意で、「な」は強意、「む」は推量。

問二 「妻は三人なむありけるを」と直前にあるので、「よろしく思ひける」妻が二人、「かぎりなく思ひて子どもなどある」妻が一人いたことがわかるはず。古語では良い悪いが「よし」「よろし」「わろし」「あし」の四段階なので、二人の妻は悪くない程度、まあまあ愛情を抱いている妻。もう一人の妻は最愛の妻で子どもたちもいる、出家の「ほだし」(妨げ)にもなる存在で、良少将は何も語らず、立ち寄りさえしないで姿を消したのです。

問三 「かけても」は文脈からも判断できるでしょう。「申す」は、「言ふ」の謙譲語以外に、「願ふ」「祈る」の謙譲語もあります。ここは長谷寺の観音にお願いしていると解すべきところ。古語で「念ず」とあれば我慢する、こらえるでした。

問四 「え」は、打消表現と呼応して不可能を表す副詞。「かくなる」は「法師になる」。「まじき」は打消推量の助動詞。最愛の妻が「いみじ」(ひどくつらい)と思う姿を見ると、良少将も「法師になることができそうにない気持ち」がしたので、最愛の妻のところへは立ち寄りことさえせず、姿を消したのです。

問五 「なむ」「ぞ」「こそ」などの強調の係助詞は、その係助詞が付いている文節を強調します。「～なむ」とあれば「～」の箇所を強調します。ここでは「ほどになむ」とあるので「ほどに」が強調されています。当該の文は、「初瀬の御寺に、この妻まうでにけり」を受けたものですから、この妻が長谷寺に詣でたのは、…という「ほどで」あった、ということで、妻が夫の消息を知りたくて長谷寺の観音に祈るため

に参籠してきた時期が、良少将が出家してあちこちで修行をして回り、ちょうど長谷寺で仏道修行している時期であった、と偶然に時期が重なるという劇的なタイミングの一致を強調しているのです

問六 (1)「さて」は「死にたりとも」に係るので「身を投げて」の意。(2)係助詞「なむ」の付いた文節に係る文節は連体形で文が結ぶという係り結びという現象が起こることは、中学校の国語で勉強し、その結びが省略される場合と消滅する場合があることは、高等学校の国語で勉強するはず。ここは、その後者のケース「結びの消滅」で、「結びの流れ」とも言います。「さてなむ死にたる」(身を投げて死んでいる)と結ぶべきところが、接続助詞「とも」が付いて結びが流れています。同じ現象が起こっているのは、「妻は三人なむありけるを」という箇所です。「三人なむありける」で結ぶべきなのに、接続助詞「を」が付いて結びが流れています。「結びが流れている文節」を問うていますので「ありけるを」と答えることになります。

問七 助動詞の文法的な意味を問うています。「まし」は反実仮想以外に「ためらいの意志」を忘れないようにしたいものです。良少将は、悲しむ最愛の妻のところへ走って出ていこうか、どうしようかと自問自答し、走って出て行くことをためらっています。「に」の識別はしっかり身に付けておきたいもの。「ける」は、過去以外に「発見の詠嘆」が大切です。気づきの「けり」とも言われます。「し」は、かつての自分の経験を回想していることを示しています。

問八 文学史の問題。「僧としても位を極め」「六歌仙の一人」がヒントとなります。